

いつ 2012.02.19(日) 無風・快晴ただしこの日赤岳は-25度
どこ ハッ・硫黄岳(2760m)
コース 赤岳山荘～赤岳鉱泉～硫黄岳
参加者 後藤隆徳(64歳11ヶ月19日)、小松眞明、浜道久美子
標高差 上り 赤岳山荘約1700m～硫黄岳2760m＝約1060m
下り //



1. 赤岳山荘発6:55

J A南駿を5:00に出発し中央高速小淵沢ICで下りる。天気が良く空気が乾燥し鮮明に見える南アルプス、八ヶ岳連峰の山々を堪能。今日の硫黄岳の展望を期待する。

赤岳山荘駐車場よりアイゼン未装着の雪山装備(ヤッケ・スパッツ・ストック・バラクラバ)で積雪林道を気温が低いと出る鳴き雪の音をキュッキュッと奏でながら出発。

(編者注＝バラクラバ・・・目出帽)

2. 赤岳鉱泉着8:25

林道から比較的なだらかな樹林帯を軽やかなペースで進みアイスクライマーのため人工的に作られた巨大アイスキャンディに迎えられ赤岳鉱泉小屋に到着し小休止。

気温は低いが上半身が汗ばんでいるためヤッケを脱ごうか悩んだがこれからの風による体感温度の低下を考えそのままとし、ストックをピッケルに持ち替えアイゼンを装着。



3. 稜線直下 11:00

樹林帯の圧雪された山道を歩く分は良いが少し外れた場所に踏み込むと膝までズボッと埋まってコケてしまう。そのようになるほどの積雪量がある。

すれ違う下山の登山者も多く、彼等らから今日の展望は最高との情報。高度が上がるにつれ樹林帯の切れ目から時より見上げると見える赤岳、阿弥陀岳が間近に迫りさらに迫力を増し期待を膨らませる。

樹林帯を抜け稜線直下ではさらに雪の量が増し雪庇のすぐ下を登るエリアがあり雪崩の可能性のある危険地帯ため慎重にペースを上げる。

(編者注＝何年か前この雪崩で数名事故死。帰路、雪庇下で休憩者がいたが、過去の経験を学ぶべき)



4. 頂上直下 11:40

稜線から頂上までは遮る物もなく赤岳、阿弥陀岳の雄大な山々に包まれながら急登をピッケル突き突き登って行く。

目前に頂上が見えてくると俄然元気が出て最後の急登を快調に登り頂上を目指す。

ここからの景観は何と素晴らしいことか。山には上ってよい山、景観がよい山とあるそうだが、ここは後者だろう。



5. 硫黄岳頂上 11:50

頂上に到着すると360°見渡す限りの圧巻の絶景に思わずワーと声を上げていた。

硫黄岳は想像していた地形とは異なり平らな台地で遮る物が無いため風が作った棒に雪が旗のように付いた、「エビのシッポ」(左上写真)の芸術品を見ることができた。

天候が良く陽が射していても微風ながら気温が低いため風が肌に刺さり痛いため写真撮影後に絶景鑑賞を惜しみながら下山を開始。



6. 下山 14:20

頂上から樹林帯までは一步一步を慎重に踏みしめながら下り、樹林帯からは積雪量としてはとても下り易くバイパスルートも利用しアイゼンを引掛けてコケないように注意して駐車場までに軽快なペースで下る。

CLに雪山登山への指導・チャンスをいただき、一步踏み込み雄大な展望と貴重な経験ができたことに感謝します。

【参加者・ひとこと】 浜道久美子

壮麗な山には雪が格別に似合う。雪で稜線がくっきり浮かび上がった山脈を遠くから眺めると背筋がぞっとする位に美しい。また、3D画像を見ているかのように山のダイナミックな凹凸を感じる事が出来るのは雪しかありえない。

そんな雪山の裾野に近づいて見上げてみる。凜として誰も寄せ付けない。雪で山頂が覆われている山こそ特別厳しい。それなのに何故 登るのだろうか？ 今回の山行で分かったような気がする。山の頂上に近くに従って視界の広がりを感じ、山との一体感を感じ、ちっぽけな私がこの壮大な自然を全て手中に入れたように感じる。これが醍醐味なのだろう。

見上げていた山々を同じ高さの目線で見ると。登らないとありえない話だ。あっちもこっちも見える。赤岳のトラバース道、横岳頂上の登山者も見える。素晴らしい。見事な景観に心臓が高鳴る。この心地の良い興奮は上りの苦しさを忘れさせてしまったようだ。下山は後ろ髪を引かれるような思いだった。

硫黄岳は抜群に展望の良い山だった。今回の山行の重要なポイントは無風、快晴だったこと。リーダーの話によると「地元の人ならばともかく、他からの登山者では確立が低い。ましてや、今年は特別に冬型が強いので非常に運がよかった」とのこと。

私にとっては前回、天候不順で厳しい山だったので、今回は大変貴重な経験をさせて頂いたと天にリーダーに小松さんに感謝しております。 合掌

【リーダー・ひとこと】

素晴らしい冬山だった。光満ち溢れた神々しい山々がそこにあった。冬山は45年近くやっているが、こんな山はなかなか経験出来ない。この日は信州・菅平でマイナス29.2度を観測した。赤岳がマイナス25度だったと言う。硫黄岳もすくなくともマイナス20度はあつたらう。実はこの低温が山々を美しく装う要因なのだ。低温で雪の光り方が違う訳。素晴らしい雪山だった。

毎年、誕生月の2月はイイ山に上っている。2011年・西岳～編笠山、2010年・八ッ・硫黄岳、2009年・赤岳、2008年・檜洞丸、2007年・北ア・輝山という感じ。

今年は硫黄岳に再びやって来た。最近の新しいメンバーだった。長く山をやっていると、どうしてもマンネリに陥る。毎年毎年毎回毎回、ピュアな気持ちで臨むのが、長続きの秘訣だ。何よりも自身が楽しまなければ、継続はない。そのためには、やっぱりイイ仲間が必要。イイ仲間といい関係を保っていくことは、山に上る以前に努力しなければならないことだ。

先週は、蓼科山だった。Hが本格的冬山初参加。モーレツな冬山で荒々しい洗礼を受けた。初めての冬山が辛く・厳しく・不快なものだった。しかし、振り返ってみれば、やっぱり本格的冬山が初めてだった甲斐駒のIも、同じく昨年末甲斐駒のKも、やっぱり厳しい山だった。

本格的冬山が初めての時、好天よりむしろ荒天のほうが、新人には有益。山を甘く見てはいけません、という仏様の啓示だろう。

そんな経験を踏まえて今回はKもHも、素晴らしい雪山を十分堪能した。これだから雪山はヤメられない。

どんなに気温が低かろうが、風が無く好天なら雪山はサイコーだ。

今後も皆と一緒に楽しみたいものです。



以上